

私の工夫

「考え、議論する」道徳科への転換に向けて、深く考えるきっかけとなる発問の構成と板書の図式化

岡山市立三敷小学校

教諭 内藤 薫



1 はじめに

道徳の新学習指導要領では、

「道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方

についての考えを深める」ことが大切とされ、登場人物の心情を

「読む道徳」から道徳上の問題を「考え、議論する道徳」への質的

転換が求められている。本校では教科化に向けて、「新しい自分に出会い、自己の生き方を豊かにす

る道徳の学習とともに語り合い、よりよい生き方を考え、それを日常生活に生かす児童の育成」を

研究主題に、3年間の実践を積み上げてきた。「考え、議論する道徳」の授業をつくるために、私が

行ってきた発問の構成と板書の図式化についての取組を紹介したい。

2 深く考えるきっかけとなる発問の構成

(1) 大きな問いで授業を構想

一つの大きな問いを授業のテーマに設定し、登場人物がそのような行為をとった経緯や変容を起した大本の心を聞く授業を行った。子どもの知的好奇心を刺激するテーマをつくれれば、導入がより効果的となり、子どもたちは「知りたい」という問題意識をもって授業に臨むようになった。例えば、「100%信じられる友達か」というテーマを設定する。子どもたちは、親友なら信じるもの

だと考える。そんな子どもたちに、「友達が間違っていると思っても、信じるのが親友なのか」と問えば、その価値観は揺らぎ、再構築の必要に迫られる。このように、子どもたちにとって切実な問いを先取りして、考え出すきっかけを与える教師提案型の発問からテーマを設定していった。子どもたちが慣れてくると、「当たり前」を見直す視点が身につき、自ら問題提起をするようになった。

(2) 問い返し

子どもたちの発言をいったん懐に入れて、「なるほど、そういうことか、だったら…」と学級全体へ問い返すことで、友達と自分の考えをつなげたり、深めたりすることができると考える。「もし自分だったら」と立場を変えて考えたり、「助けることと見守ることの違いは何か」と比較をして考えたりする発問を子どもたちの発言に合わせてしていった。子どもたちは、友達の意見や自らの経験など様々な思考回路を駆使して、自分なりの答えを見いだそうとしていた。また、「あなたは、この中の誰と友達になりたいか」と一般的な価値観ではなく、自分自身の選択を迫ることで、より自分との関わりとして考えることができた。

この問い返しは、必要に応じて適切なタイミングで使うことが大切である。この授業で何を考え、気づかせることができたらしとするかという軸をもって、子どもたちの言葉に耳を傾けていきたい。

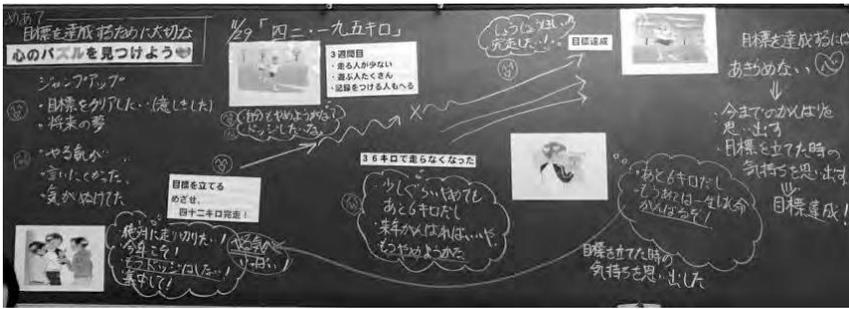


①授業の導入

3 板書の図式化

(1) 横書きで図式化

通常の道徳の板書は縦書きが一般的だが、過程をたどっていくような展開で授業をする場合、心の変容を左から右への矢印で図式化できる横書きの方が考えやすい。写真②は、4年生の



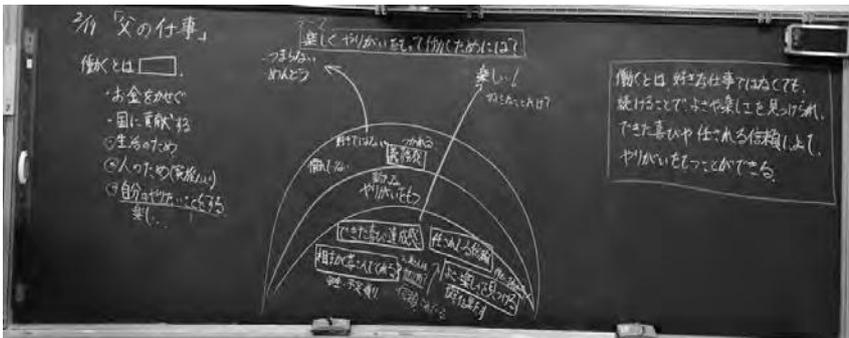
②登場人物の心の変容をベクトルで図式化

「四二・一九五キロ」で、なぜ目標を達成するまでがんばり続けることができたのかを考えたと際の板書である。「ぼく」の気持ちをベクトルの形や色で描き分けながら考えることが、考えを深める手立となった。横書きのもう一つの利点は、比較がしやすい点である。写真③は、



③比較を図式化

5年生の「ひとふみ十年」で行った板書で、「花は弱くて可哀想だから大切にしよう」と「花も一生懸命生きているから大切にしよう」という気持ちの違いを考えたとこの比較を図式化したことで、子どもたちは植物愛護にとどまらず、生命の尊さというところまで考えを深めることができた。



④層的構造的な板書

(2) 層的構造的な板書

板書

写真④は、5年生の「父の仕事」で、「やりがいとはどんな気持ちから生まれるか」という考えを層的構造的に書いた際の板書である。子どもたちはそれをより所にして、やりがいを支える大本の心をより深く考えようとした。道徳では、一つの価値が単体で作用することはほとんどないと考えられる。例えば、相手に親切にするためには、勇気を出さなければい

けないときもある。また、相手が友達だったら思いやるだけでなく、「彼ならきつとできるから、見守ろう」となると、友情を感じたり、相手を信頼したりする。このように、価値は複合体であると考え、層的構造的に板書することが、多面的・多角的な思考を広げるのにも役立つと考える。

4 おわりに

本実践では、道徳の授業を変えるために、発問と板書の工夫と改善を行った。すると、子どもたちの反応も変わり、私も授業の中の指導に柔軟性が生まれた。書いてあるものが答えではなく、書いていない世界にこそたどり着くべき本質がある、という認識をもって授業に臨み、これからも子どもたちと一緒に答えを見つけ出していきたい。